
津田塾大学紀要

1987

- 黒い霊鳥——グロリア・ネイラーの『ブルースター通りの女たち』——
- マーク・トウェインの探偵小説
- 人間復活——『ヘンリー五世』の求婚シーンから——
- D. H. ロレンスの『白孔雀』における自然
- 「第七の日」——エルゼ・ラスカー＝シューラー第二詩集について——
- *Violencia y astucia en La ciudad y los perros*
- 指示詞についての日英語の比較
- 「語彙化」について
- J. H. ニューマンの『承認の論理』再考
- The British Peace Movement and Women's Involvement
- 高学歴女性の職歴構造にたいする一考察——津田塾大学卒業生の場合——
- One Parameter Family of Continued Fraction Expansions and Its Metrical Theory
- On Dehn Surgery along a Certain Family of Knots
- ソ連の中等学校における天文教育の改革
——1970年代後半に提起された2つのプログラム案——
- ボディ・コミュニケーション——コミュニケーションとしての身体の動き——
- 助詞「の」の起源について
- 台湾郷土文学の香——李喬——

目次

黒い霊鳥——グロリア・ネイラーの『ブルースター通りの女たち』——
..... 荒 このみ (1)

マーク・トウェインの探偵小説..... 朝日由紀子 (17)

人間復活——『ヘンリー五世』の求婚シーンから——..... 森 祐希子 (39)

D. H. ロレンスの『白孔雀』における自然..... 田崎由布子 (57)

「第七の日」——エルゼ・ラスカー=シュラー第二詩集について——
..... 松島富美代 (81)

Violencia y astucia en *La ciudad y los perros* Akira SUGIYAMA (93)

指示詞についての日英語の比較..... 千葉修司・村杉恵子 (111)

「語彙化」について 島村 礼子 (155)

J. H. ニューマンの『承認の論理』再考 川中なほ子 (175)

The British Peace Movement and Women's Involvement Fumiko UDAGAWA (193)

高学歴女性の職歴構造にたいする一考察——津田塾大学卒業生の場合——
..... 和田 修一 (217)

One Parameter Family of Continued Fraction Expansions and Its Metrical Theory
..... Yuko HARA (239)

On Dehn Surgery along a Certain Family of Knots Noriko MARUYAMA (261)

ソ連の中等学校における天文教育の改革
——1970年代後半に提起された2つのプログラム案——..... 岡崎 彰 (281)

* * * * *

ボディ・コミュニケーション——コミュニケーションとしての身体の動き——
..... 井上則子・井上誠治 (33)

助詞「の」の起源について..... 久島 茂 (23)

台湾郷土文学の香——李喬——..... 岡崎 郁子 (1)

紀要委員

安 香 潔
亀 田 帛 子
松 浦 令 子
村 上 健
上 田 明 子

指示詞についての日英語の比較

千葉修司

村杉恵子

0. はじめに

日本語の指示詞「これ・それ・あれ」についての研究は、佐久間（1936, 1951）以来多くの研究者によって手懸けられて来ている⁽¹⁾。一方、英語の指示詞の研究、特に大人の文法としての指示詞の研究は、Fillmore（1971, 1982）、Lakoff（1974）、Lyons（1975）など比較的数量が少なく、むしろ、幼児による指示詞の習得に関する研究がその多くを占めていると言える⁽²⁾。この論文では、日本語の指示詞に関する言語知識を持った英語学習者が英語使用の実際の場面において或る意味での戸惑いを感じるような英語の指示詞の用法を中心に、日英語の指示詞に関する幾つかの重要な特徴を取り上げてみたい。

1. 「これ」に相当する *that*

指示詞の用法に関する日英語の違いの中で、日本人にとって最も際立った違いとして映るのは、手に持った物あるいは手で触っている物を指すのに、英語において *this* の代わりに *that* を用いることがあるという事実であろう。

まず、そのような場合の実際の例を幾つか観察してみよう。

Beetle Bailey

(1)



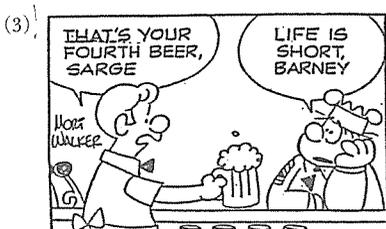
by Mort Walker

Bringing Up Father

(2)



by B. Kavanagh & F. Fletcher



Beetle Bailey by Mort Walker



Blondie by Chic Young



このような場面において、日本語ならば、いずれも、「それ」ではなく「これ」を用いなければならない。これとよく似た例として、国広（1985）の指摘している次のような場面も興味深い。



GEECH by Jerry Bittle

この漫画について国広（1985）は次のような説明を加えている。

「‘You call that chili?!’ の that の用法に注意。自分の口の中のもの了指して that を用いている。日本語では『これ』としかいえないが、英語で

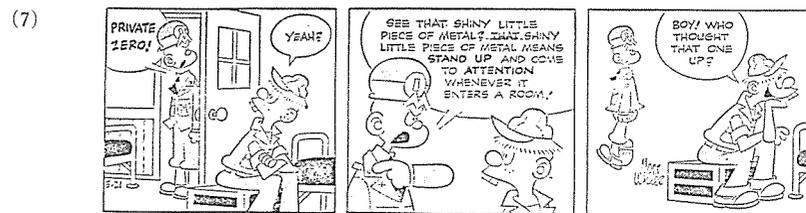
は、相手の要望や質問に答えるときは指示詞の基準点を相手側に移すという用法規則があり、自分の側のものを that で指すことになる。」

このように、手に持った物あるいは手で触っている物を指すのに、英語において、this の代わりに that を用いることがあるという事実を指摘しているものとして、外に Lyons (1981), Fillmore (1971, 1982), Levinson (1983), Nagasawa (1985) などがあるが、たとえば、Lyons (1981: 235) は次のように述べている。

「たとえば、もし話し手が何かを手に持っているなら、その物を指すのに通常は（それが空間・時間的に近距離にあるため）that でなく、this を用いる。もし、そのような場面で、“What’s that?” と言ったとすると、その場合の that は話し手の持つ嫌悪あるいは忌避の気持を表すことになるだろう。すなわち、話し手は自分が指示しているものから気持の上であるいは態度の上で距離を置こうとしていることになるだろう。」⁽³⁾

確かに、that の用法に関するこのような説明は国広（1985）の挙げているような例についてはよく当てはまるように思われるが、上で(1)-(4)として挙げた例などには当てはまらない⁽⁴⁾。

このことに関連して興味ある例として更に次のような例を考えてみよう。



Beetle Bailey By Mort Walker

上の漫画の2コマ目の“See that shiny little piece of metal? That shiny...”の中に用いられている that は日本語では「この」となるべきところであるが、この場合の that には嫌悪の気持や忌避の気持はまったく含まれていないと思われる。むしろ、この場合の that には誇示しようとする気持、誇らしげに思う気持が込められていると言える。このように、何か尊敬に値する

もの、あるいは、公に堂々と通用するものを自慢げに人に示す場合には、その物を指で触りながら“(You) see that . . . ?”(「この～が見える?」)のように言うことになるが、その逆に、何か余り自慢にならないもの、あるいは、公にできない個人的なもの、たとえば、額の切傷など、を人に示しながら言う場合には“(You) see this scar?”のように this を用いるのが普通である⁽⁵⁾。

このように、手に持った物や手で触っている物を that で受ける用法を、嫌悪の気持や忌避の感情のような、或る意味で否定的な要因だけで説明しようとする、部分的な説明にしかならないことに注意しなければならない。十分に深い説明とは言えないまでも、もっと一般的に当てはまるような説明としては、たとえば Fillmore (1971, 1982) の挙げている次のような記述の仕方が考えられる。

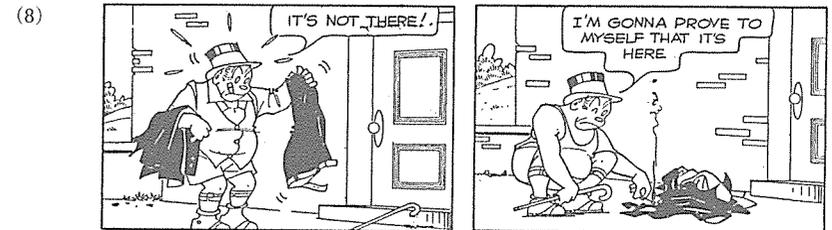
すなわち、Fillmore (1971: 14-15) は指示詞の持つ距離の遠近の対立が「中和される (‘neutralized’)」場合の一つの例として、患者が痛む歯を歯医者に示しながら、“It’s this one” あるいは “It’s that one” のいずれの言い方もできることを示し、この後者の文は聞き手の見方 (the addressee’s point of view) が取り入れられた文であるように思われると述べている⁽⁶⁾。

このように、誰の観点から物を見るかということによる説明 (the point-of-view explanation) を用いて、Fillmore (1982: 46) は更に概略次のように述べている。すなわち、「手で物に触れたり (Touching), 人に物を手渡す (Presenting) ような時に指示詞を用いる行為は普通の指示行為 (Indicating) とは異なっている。たとえば、テーブルの上を叩きながら this table と言ったり、ワインの瓶を手を持って、this bottle と言うような場合である。このような場合、普通の指示行為と異なるのは、特に、話し手が行なっている指示行為によって一体何が指示されているのかを聞き手が探り出す必要がないという点においてである。今話題になっている物の話し手からの距離 (の違い) が問題にならないので、距離の違いに応じて this/that を使い分けるといえる必要なくなるのである。すなわち、このような場合、this/that の違いはその基本的な機能を果たさなくなる。その代わりに、もの見方 (a point of view) の違いというようなものが関わってくる。たとえば、もし示された物を手で触れながら私が “Would you like this one?” と質問したならば、聞き手は私が自分の立場からその物を捉えていると思うかも知れないし、一方、同じような状況で、“Would you like that one?” と質問したならば、聞き手は私が聞き手の立場からそれを見ていると思うかも知れない。」

手に持ったものを指すのに this の代わりに that を用いる用法を、このよ

うに、this/that の対立が中和される現象として捉える見方は、上で取り上げた関連ある全ての例に当てはまることになる⁽⁷⁾。しかし、更に一歩進んで、このような現象に対する説明として、聞き手の立場からものを見ていることを示そうとする場合に、このような this から that への移行が行われるのであるというような説明を考えてみると、一体このような説明が関連する全ての場合に当てはまるものかどうか判然としなくなってくる。(たとえば、上で挙げた例のうち特に(1)や(2)の場合を考えてみればよい。)⁽⁸⁾

以上は手 (や足)⁽⁹⁾ で触っている物を指すのに that が用いられることがあるという英語の事実についてであるが、同じようなことが、場所を示す there についても見られる。すなわち、日本語では手に触れている物を場所を表す指示詞で示すとすれば「そこ」ではなく「ここ」を用いなければならないが、英語ではそのような場合でも、次の例に示すように、there を用いることができる。



Bringing Up Father by Frank Fletcher



Blondie by Chic Young

このように、手（や足）で触れている物を指すのに *that* や *there* を用いることができるという英語の事実は、それに直接相当する用法を日本語の指示詞が持たないために、普段日本人の英語学習者が気が付かない点の一つであるが、英語の事実を注意深く観察してみると、これらの用法が、英語においては、日本人が思う程には特殊な用法ではないことが分かる。以下に示すのは、筆者達が（テレビ）映画を見ていて気が付いた同種の例の一部である⁽¹⁰⁾。

- (10) (写真を手に持って相手に示しながら)
 “Look at that.”
 「これを見て。」
 (“Cagney and Lacey”)
- (11) (路地裏のごみの中から見つけたお目当ての靴を眺めながら)
 “Oops! What have we here? Well, would you look at that!”
 「おーっと。こいつあ臭いますよ。あれまあ、大当り。」
 (“Kojak: The Forgotten Room”)
- (12) (3歳くらいの子供に2枚の絵を見せながら)
 —“Which one do you think looks like a Matisse painting?”
 「マチスのかいた絵はどっちかしら？」
 (一方の絵を指で押えるようにして示しながら)
 —“That one.”
 「こっち。」
 (「ニュース・ドキュメント：これが世界だ」)
- (13) (100万ドルの値打ちのある Saracen horse (宝石をちりばめた彫刻の馬) をごみの中から見つけて、それを手にした警官が)
 “Well, look at that!”
 「ああ、すげえなあ、こりゃあ！」
 (“McCloud: The Million Dollar Round Up”)
- (14) (渡された写真を手にしながら)
 “Where did you get that?”
 「どこでこれを？」
 (“Kojak: Black Thorn”)
- (15) (a) (契約書のサインすべき箇所を指さしながら)
 “Sign there, and there.”

「ここと……ここですね。」

(b) (同じような場面で)

“Sign there please.”

「ここにサインして下さい。」

(“Hawaii Five-0: Why Wait Till Uncle Kevin Dies?”)

- (16) (理髪店で主人公が髪を切ってほしいと頼むと、店の主人(A)がその主人公(B)に「これくらいざんすか?」と尋ねる。)
- A: “Higher.” 「もっと。」
 B: “Here?” 「このくらい?」
 A: “More.” 「もっと。」
 B: “Here?” 「ここ?」
 A: “Even more.” 「いいえ、もっと。」
 B: “Well?” 「で、どのくらい?」
 A: (手で自分の髪を押さえながら)
 “There.” 「ここ。」
 (“Roman Holiday”)

以上の観察をまとめると、日本語では手に持っている、あるいは、手で触れているということが指示詞「この」あるいは「これ」の使用を要求する重要な決め手になるのに対して、英語においては、それが日本語ほど重要な働きをしないということになる。最後に、このことと密接に関連する興味ある事実として、次のような場合を指摘することができる。すなわち、次の漫画の6コマ目において、

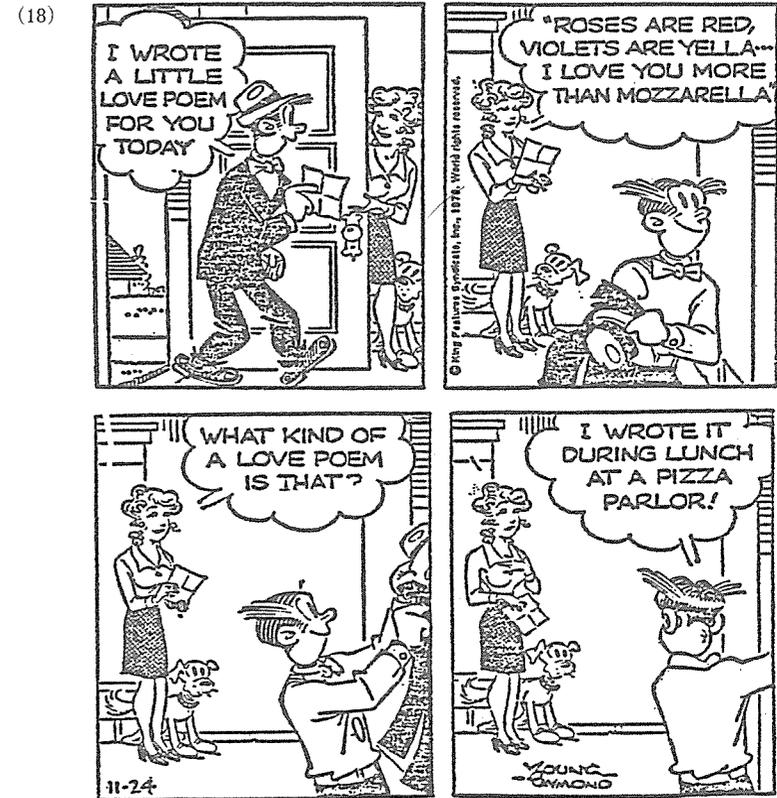


by Dan DeCarlo



指示詞 *that* が用いられているが、これは手に持った *jar of stale currants* (腐りかけたカラントの入った瓶) を現場指示的に指しているのではなく、同一発話中の前の部分に現れた名詞句 *a jar of stale currants* を文脈指示的に受けているのである。一方、日本語においては、このような場合、現場指示用法の方が優先されて、指示詞「これ」を用いることになる。すなわち、「ほら、ここに腐りかけたカラントの入った瓶があるよ。きっとこんなものからだって彼は電気を起こすことができると思うよ。」のように表現するのが普通である。従って、日本人はこの漫画の6コマ目の *that* の用法を、先に示した、自分の手にした物を *that* で受ける場合の一つと見誤る可能性がある。

同じようなことが次の漫画の3コマ目の *that* についても言える。



Blondie By Chic Young

すなわち、ここでブロンディが、「What kind of a love poem is that?」（「一体この恋愛詩は何なの？」）と夫に聞いている時の指示詞 *that* は、彼女が手にしている（紙に書いてある）詩を現場指示的に指すのではなく、2コマ目で彼女が読み上げた「Roses are red...」の詩を文脈指示的に受けているのである。（但し、この場合の指示詞は、日本語においても文脈指示的に用いられていると言えるかも知れない。もしそう解釈するならば、この場合の英語と日本語の違いは *that* 対「これ（この）」ということだけの違いになるが、それが日本人にとって理解するのが容易ではない種類の *that* の用法の一つであることに変わりはない。）

以上のような英語の事実を考慮すると、次のような場面において *this* の代わりに *that* を用いることができないことの原因として、単に、「その物を

話し手が手に持っている、あるいは、手で触れているから」というような答えでは説明にならないことが分かるだろう。

Beetle Bailey



by Mort Walker

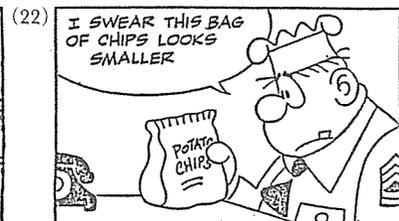
Bringing Up Father



by Frank Fletcher



Beetle Bailey by Mort Walker



以上この節では、日本語の指示詞「この」が英語の指示詞 *that* に相当する場合があるという事実を取り上げたが⁽¹¹⁾、次節においては、日本語の「それ」が英語の *this* に対応することがあるという事実を目を向けてみよう。

2. 「それ」に相当する *this*

日英語の指示詞に関するその重要な研究の中で服部 (1968: 75) は「日本語ならソレというところを *this* ということもときどきあるようだ。」と述べ、次のような観察をしている。

「デパートの *clothing* の掛りの売り子なら、買い手が当てて見ているネクタイを *this* と言い得るが、それはその売り子の専門内 (すなわち勢力範囲内) のことに属し、しかも買い手は売り子にこのことに関しては“身をゆだねて” いるからだ。」⁽¹²⁾

日本語の「それ/その」が英語の *this* に対応することを示す別の例として、映画“*Sound of Music*”の中次のような一場面を取り上げてもよい⁽¹³⁾。

- (23) (4, 5メートルの距離を置いて向かい合って立っている大佐とマリアとの対話。マリアが着ている粗末な服について大佐が質問する。)
大佐：“What about this one?”

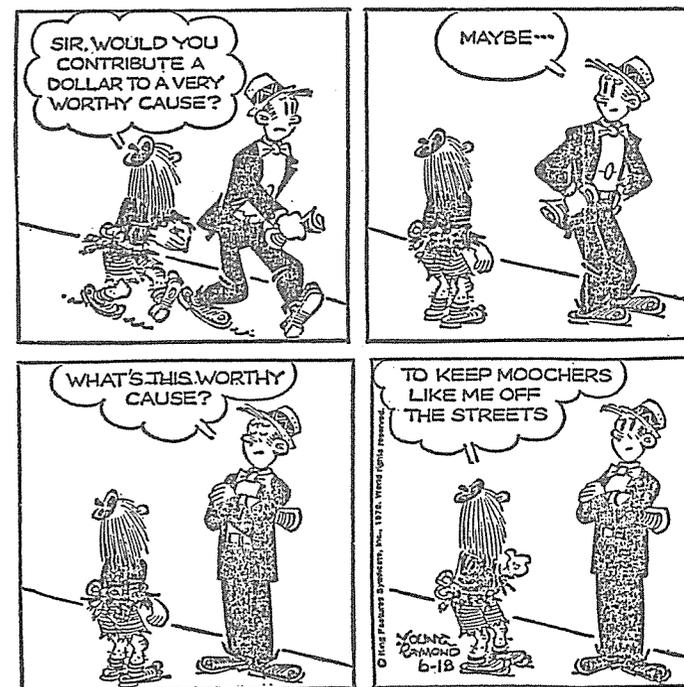
(「で、その服は?」)

マリア：“The poor didn't want this one.”

(「誰も欲しがらなかったんです。」)

これらの場面における *this* の用法は或る意味での親密さを表す感情移入の表現の一つであると思われる⁽¹⁴⁾。面白いことに、現場指示の *this* に関するこのような用法と同じような用法が文脈指示の *this* についても見出せるのである。すなわち、次の漫画において、3コマ目の *this worthy cause* の *this* は、相手の持ち出した話題 *a very worthy cause* に積極的に興味を示してやろう (一緒になって考えてやろう) という態度の表明としての *this* の用法であると考えることができる⁽¹⁵⁾。

(24)



Blondie by Chic Young

ところで、上に示した三つの場面における英語の *this* は日本語では、いずれも、「その」を用いるのが普通であるが、これらのうち少なくとも現場指示の場合には、日本語でも「この」あるいは「これ」を用いることがあるようである。たとえば、矢沢 (1985) の挙げている次のような例がそうである。すなわち、矢沢は「君ノ着テイルコノ服ハ、ドコデ買ッタノ。」⁽¹⁶⁾ のように、話し相手の所有物にも *コ* が用いられることがあることを指摘し、このような表現は、相手の所有物でも話し手の関わり意識が強い場合に用いる表現であることを述べている。

3. 指示詞と代名詞の用法の違い

英語において、同一物を「先行詞」とする指示詞と代名詞が前後して用いられる場合は、指示詞が最初に用いられ、その後には代名詞が用いられるのが普通である⁽¹⁷⁾。特に、同一の指示詞を何度も繰り返すのは、日本語にあっては自然な用法であるが、英語では普通許されない。

たとえば、日本語では、

(25) それを私を咬んだので、私はそれを蹴った。

のように、「それ」を繰り返し用いて、最初の「それ」と同じ指示物を指すことができるが、英語においては、次の例のように、*that* を繰り返すことはできない⁽¹⁸⁾。

(26) **That bit me so I kicked that.*⁽¹⁹⁾

この場合、二番目の *that* を代名詞 *it* で置き換えれば、次のように文法的な文が得られる。

(27) *That bit me so I kicked it.*

なお、(26)の文に現れる二番目の *that* にストレスを置いた場合の文は文法的ではあるが、その場合の二つの *that* は同一物を指すことができない。すなわち、そのような文は「私は私を咬んだものとは別の動物を蹴った。」という意味を表わすことになる。同じように、

(28) *That is dangerous, but that is not.*

のような文は、たとえば、動物の檻が幾つかあって、その檻の中のそれぞれ異なる動物を指して、「これは危険だが、これは危険ではない。」と言うような場面で用いることができる。(Isard (1975 : 290)) このように、対比的に用いる二つの同一指示詞の二番目のものにはストレスを置くことになる。従って、日本語の「これがいいですか、それとも、これ(がいい)ですか?」のような表現に対する英語の文、

(29) *Do you want this one or this one?*

に用いられる二つ目の *this* にはストレスを置かなければならない。このように、同一物を指すのに指示詞 *this* あるいは *that* を繰り返し用いることにはかなり強い制限があるように思われるが、但し、このことが当てはまらない場合もある。たとえば、次のような文において、

(30) *If you try to pat that lion, that lion will bite you.*

(31) *I did that because I felt like doing that.*

二番目の *that* にストレスを置かなければ、それが一番目の *that* と同一指示的になるようである。(Isard (1975 : 291))

このような指示詞の繰り返しがどのような場合に許されるのか、詳しいことは未だ分からないが、この指示詞の繰り返しについての現象も、日英語で異なる指示詞の用法の一つであるということは言えるであろう。次に、このことに関する興味ある事実について、実際の英語使用の場面を幾つか観察しながら考えてみよう。

(32)



Blondie by Chic Young

この漫画の2コマ目の they 及び3コマ目の them のように、自分の手に持っている物を代名詞で受ける英語の用法に日本人が習熟するにはかなり時間がかかるように思われる。その大きな原因は、このような場合、日本語で主語を用いて表すとすれば、「これはいかがですか？ これは(この花は)……。」とか、「結構だね。ところで、これは何の花?」のように指示詞「これ」、「この」を用いることになるからである。

同じようなことが次のような場面についても当てはまる。

(33)

Bringing Up Father
by Frank Johnson

すなわち、このような場合、日本語では「こんなものはもう見たくないわ。これは全部教会のバザーに寄付しよーっと。」のように、指示詞「これ」を繰り返して用いても自然な表現になる。と言うより、この場合、代名詞「それ」及び指示詞「それ」を用いることができないことに注意しなければならない。

なお、次のような場面では、

(34)



"I can't get them any higher.
My bursitis is acting up again."

"I can't get them any higher." 中の代名詞 them は強盗が "(Stick 'em up!) Higher!" と言ったか、あるいは、そのように言いたげな様子を被害者が察知して、その'em [=your hands] すなわち自分の手(あるいは腕)を指して用いている。このような場合日本語では、「この手はもうこれ以上上がらないよ。」のように「この」を用いることになるのだが、英語では、"I can't get these hands any higher." のようには言わない。(但し、these hands の代わりに my hands を用いることは可能である。)

最後にこれと関連する例として、次の漫画の最後のコマの中で、男が“Your wife sent them over.”と言っている時のその代名詞 *them* の用法も日本人にとっては難しい用法の一つであろう。

(35)



なお、指示詞と代名詞の用法の違いについては、特に *that* と *it* の用法の違いとして Isard (1975: 289-90) が指摘している次のような興味ある事実がある。すなわち、次のような文において、

(36) First square 19 and then cube $\left\{ \begin{array}{l} \text{it.} \\ \text{that.} \end{array} \right\}$

代名詞の *it* は数字19をその先行詞とする。従って、その文の意味は「まず19を二乗して、次にその同じ数19を三乗しなさい。」となる⁽²⁰⁾。それに対して、指示詞 *that* の方は、数字19をその先行詞とするのではなく、“square 19”（「19を二乗せよ」）という演算の結果得られた数、すなわち、19の二乗を指すことになる。つまり、その文の意味は「まず19を二乗して、次にその結果得られた数を三乗しなさい。」となる。

このように、指示詞の場合には、その先行詞に相当するものが与えられた言語表現自体の中に、必ずしも、見出されなくてもよいことが分かる。そのような場合には、与えられた言語表現を出発点として、そこに何らかの推論作用を働かせることによってその先行詞が、いわば、間接的に決定されることになる。このような、いわゆる、推論照応⁽²¹⁾は指示詞の場合には広く見られる現象であるが、それに対して、普通の代名詞は言語表現自体の中に明示的に現された先行詞を要求する傾向があるようである⁽²²⁾。

なお、同じ一つの場面で *it*, *that* のいずれを用いてもよい例として次のような場合があるが、このような場合は、*it* も *that* と同じように現場指示的に用いられていると解釈できるだろう。

(37)



Blondie
by Chic Young

4. 音及び臭いを表わす指示詞

指示詞の用法に関する日英語の違いを問題にすると、興味ある事実を提供してくれる事柄として、音および臭いについての指示詞の用法がある。まず、明確な違いとして指摘しておかなければならないのは、音の場合は、実際今聞こえている物音に対して、日英語で、それぞれ、「この」/「あの」および this/that を用いて表現することができるが、臭いの場合には、実際今臭っている臭いについて、英語では this/that を用いた表現が共に可能であるのに対して、日本語ではそのような場合、「この」だけが可能で、「あの」を用いることができないということである。すなわち、英語では次のような表現は、いずれも、自然な表現であるが、

(38) What's this/that sound?

(39) What's this/that smell?

日本語では「あの」と「臭い」を組み合わせた表現は許されない。

(40) この/あの 音は一体何だろう？

(41) この/*あの 臭いは一体何だろう？

(但し、「あの臭い忘れられないなあ!」のように、回想的意味を表す「あの」を用いた文が文法的な文になるのは言うまでもない。)

音および臭いが音源および臭源から、それぞれ、聴覚器官および嗅覚器官に到達して音および臭いが感知される時の生理的および物理的メカニズムは図式的に似ているのではないと思われるのにもかかわらず、このような「この」および「あの」の用法の違いが見られるのは興味深いことである。なお、英語において that smell が this smell と同じように自然な表現として用いられると言っても、その that smell が上に挙げた日本語の表現「*あの臭いは一体何だろう？」の中の「あの臭い」が示唆するような意味、すなわち、話し手の位置から距離的に離れた所に漂っているような臭いを、いわば、距離的な臭いの違いを明示的に区別する表現として用いられているということではない。たとえば、次のような場面を考えて見よう。

(42) As soon as I got out of the plane, I smelled something peculiar.
“What's that smell?”

I asked the man who met me at the plane.

(Art Buchwald, “Fresh Air Will Kill You”)

このような場合、“What's that smell?”のように、英語では this より that を用いる方がより自然な表現になるが、これに相当する日本語の表現では、「一体この臭いは何だ!」のように、「この」を用いることになる。

これと同じようなことが、次のような例でも分かるように、空気を吸ったり味わったりするような場合についても当てはまる。

(43)



PONYTAIL
By Lee Holley

(44)



BONER'S ARK by Addison & Johnson

次の場面は Arthur Miller の戯曲 “All My Sons” の第一幕よりの一場面である。Ann と Chris がポーチに姿を現し、Chris が手をさしのべて Ann を下の庭に導きながら次のように言う。

(45) “Take a breath of that air, kid. You never get air like that in New York.”⁽²³⁾

(Arthur Miller's *Collected Plays*, The Viking Press, 1957, p. 75)

このような場合、日本語では「このいい空気を吸ってごらん。ニューヨークではこんないい空気は味わえないから。」とでもなるべきところ。that air は「この空気」であり、「その(あの)空気」とはならない。

なお、臭いについて用いる *this*, *that* の用法の違いは、その臭いの出所をある程度予測することができるかどうか、あるいは、その臭いについて話し手が好ましい感じを懐いているかどうかによっても左右されるようである。たとえば、寝室で何か臭いがするような場合には“*What's that (smell)?*”と云うのがより自然であるが、台所に入って行って“*What's that smell?*”（「何だこの臭いは？」）などと言うと、そこで料理している人が怒り出すかも知れない。同じように、冷蔵庫を開けた時に何か玉ねぎのような臭いがしたような場合、“*What's this?*”と云えるのに対して、洋服だんすを開けた時に玉ねぎの臭いがしたような場合には、“*What's this?*”と云うよりも“*What's that?*”のように言う方が普通であろう。このような場合の *that* には、すでに第一節において示したような、話し手の持つ嫌悪あるいは忌避の気持ちが込められていると言えるであろう。臭いに関して見られる *this* と *that* のこのような用法の違いは、次のような二つの漫画にもよく表れていると思われる。

Bringing Up Father



by B. Kavanagh & F. Fletcher



Bringing Up Father by Frank Fletcher

次に、指示詞を用いて音を表す場合、英語においては、動詞の持つ時制の違いがそこに表された音の種類の違いとも密接に関係していることを示すことにしよう。まず、次のような漫画の中に用いられている指示詞 *that* の用法を観察してみよう。

Bringing Up Father

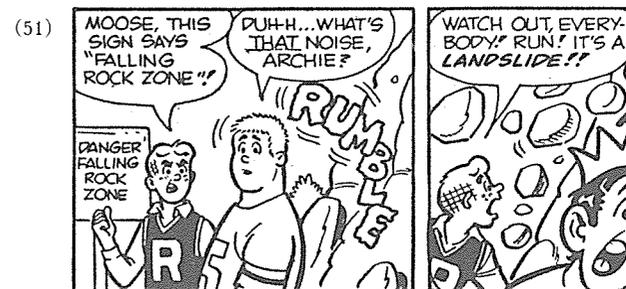


by Frank Fletcher

Beetle Bailey



by Mort Walker

Bringing Up Father
by Frank Johnson

Archie by Dan DeCarlo

上の四つの例を見て分かるように、日本語の表現「一体何だあの音は！」に相当する英語の表現として、“*What is that?*”のように、*be* 動詞の時制が現在形の場合と、“*What was that?*”のように、それが過去形の場合とがある。興味あることには、この時制の違いが指示詞 *that* により指示されている音の種類の違いに対応しているのである。すなわち、一般的に、“*What is that?*”は“*Rumble!*”（「ゴロゴロ、ゴゴッ」）や“*Groan, groan*”（「ウーン、ウーン」）などのような継続音（*continuous sounds*）に関して用いられるのに対して、“*What was that?*”の方は、“*Bang!*”（「パン、ズドン」）や“*Crash!*”（「ガッちゃん」）などのような瞬間的な音（*instantaneous*

sounds) に関して用いられるようである。

また“What is that?”と“What was that?”の持つこのような違いに関する知識があれば、たとえ具体的な音の記述がなされていないような文脈においても、大ざっぱな音の種類については、ある程度推測することができることになる。たとえば、次のような文脈の中で、主人公が“What is that?”(「あの音は何だろう?」)と(心の中で)言っていることから、これを“What was that?”の場合と比較して、彼が耳にしたその音の種類をある程度は推測することができるであろう。

(52) He started to read. Then he heard something outside.

“What is that?” he thought.

It was his neighbors, Big Beetle and Little Beetle, who lived nearby.

(T. Clymer and P. M. Martin (eds.), *The Dog Next Door and Other Stories*, p. 227)

なお、音源がかなり近くにあり、その音が今も続いているような場合には、“What is this sound?”のように、this を用いることができる⁽²⁴⁾。

5. 文脈指示的用法の指示詞

この節では指示詞 this と that の前方照応的用法、すなわち、文脈指示的用法を取り上げ、それを日本語の場合と比較してみよう。まず、よく知られているように、前方照応的指示詞 this と that のいずれをも用いることができるような場合がある。次の例は、いずれも、それが引用されたもとの文の中では this の方が用いられているのであるが、下に示すように this, that のいずれをも用いることができるというのが事実のようである。

(53) He asked for his brown raincoat, insisting that *this/that* was his usual coat during the winter months.

(this を用いた版は Quirk et al. (1985 : 373) からの引用)

(54) While he was eating, the Queen kept asking him questions. At first Edmund tried to remember that it is rude to speak with one's mouth full, but soon he forgot about *this/that* and thought only of trying to shovel down as much Turkish Delight as he could.

(this を用いた版は Harcourt Brace Jovanovich 社から出版されている

教科書 *Another Earth, Another Sky*, p. 32 からの引用)

このように、this, that は、共に、先行する文中に現れるものを代名詞的に指すことができるが、具体的文脈において this と that のどちらがより適当であるかの明確な判断を下すのはかなり難しいようである。たとえば、次のような文において、我々の調べた6人のインフォーマントのうち4人が this の方だけを選び、残りの2人は this と that のどちらも正しいと答えたが、この例文の出典 S. Pinker, *Language Learnability and Language Development*, Harvard University Press, 1984, p. 306 では that が用いられているという具合である。

(55) Take the sentence *he pushed the truck*. A child who acquired the verb *push* from *this/that* sentence could have done so by noting that the pusher argument, *he*, was in the subject position as defined by the phrase structure of English, and that the pushee argument, the truck, was in the object position.

なお、Lakoff (1974 : 350) によると、次の文においては This より That の方がどちらかと言うとより自然な感じがするとのことである。

(56) I saw Fred in his new sombrero: $\left\{ \begin{array}{l} \text{This} \\ \text{That} \end{array} \right\}$ hat is really something.

インフォーマントの間で共通した反応が比較的明確に現れるのは次のような例文についてである。

(57) In *this* play the actors who appear are Bill and Susan, in **this/that* order.

この文において、もし this が許されるとすると、それは、この文自身の中に示されている Bill と Susan の順序を指すのではなく、この文の発話に先立つ部分において既に何らかの形で明確にされているその順序、あるいは、次の例に見るように、後続する部分において始めて明確にされるその順序を指すことに注意しなければならない。

- (58) In this play the main characters appear in this order: first Bill, and then Susan.

同じようなことが次の例文についても当てはまる。

- (59) In this play Bill and Susan appear in *this/that order.
 (60) John, Mary, Tom, and Kitty came into the room in *this/that order.
 (61) Add sugar, salt, and pepper in *this/that order.
 (62) Tabletops are usually *long* and *wide* (in *this/that order), while desks are *wide* and *deep* when someone sits behind them, but *long* and *wide* for the furniture movers.

また、以下に示す例においても、同じように in *that* order あるいは in *that* sequence の代わりに in *this* order あるいは in *this* sequence を用いることはできない。

- (63) The following derivations result from applying WH-DEL and ADJ-SHIFT in *that* order.
 (G. Lakoff, *Irregularity in Syntax*, Holt, Rinehart and Winston, 1970, p. 122)
 (64) Thus Passive and Agent-deletion are intrinsically ordered to apply in *that* order.
 (G. M. Green and J. L. Morgan, "A Guide to the Study of Syntax," mimeo, 1972, p. 14)
 (65) But in the present instance no ungrammatical sentence is blocked by this ordering, since the statement of the rules is sufficient to rule out any derivation in which Subject-HV Inversion and Passive apply in *that* sequence.
 (C. L. Baker, *Introduction to Generative-Transformational Syntax*, Prentice-Hall, 1978, p. 133)
 (66) Recall that the Compound Rule (39) abbreviates two rules, (33) and (38), in *that* order.
 (M. Halle and S. J. Keyser, *English Stress: Its Form, Its Growth, and Its Role in Verse*, Harper & Row, 1971, p. 24)⁽²⁵⁾

ところで、これらの例文に対する日本語では、いずれも、「この順(序)で」が用いられ、「その順(序)で」とはならない。このような場合「その」を用いると、英語において *this* を用いた時に生ずる二つの異なる意味のうち一方の意味、すなわち、その文の発話に先立つ部分において既に何らかの形で明確にされているその順序、という意味になり、「この」を用いた時とは異なる意味を表すことになる。次の例文を参照。

- (67) これに対して、受身、倒置をこの順で順次的に適用するならば、(6)、(7)の(b)のみでなく(8)の(b)も生成することができる。
 (太田朗・梶田優、『文法論Ⅱ』、大修館、1974、434ページ)
 (68) 言語 L の変形部門 T に対して定義された二項関係 \succ に順序対 (T_i, T_j) が含まれているならば、L の如何なる文の派生においても(同一の環境節点に対して) T_j, T_i をこの順で適用することはできない。
 (同掲書、440ページ)
 (69) とともに、S と H がいる *ko* の場面を中心にして、外側へ *a* の場面しか展開しない場合と、さらにひとつ *so* の場面が加わって、*so* と *a* の二つ(以上)の場面がこの順序に展開する場合である。
 (柴田武編『言語の構造』、大修館、1980、29-30ページ)⁽²⁶⁾

このように、英語で in *that* order (sequence)、あるいは、日本語で「この順序」という表現を用いて、その直前の部分で表された物の順序を指示する時のこの用法は一見文脈指示の用法のように見えるが、厳密な意味での文脈指示用法とは異なることに注意しなければならない。すなわち、このような場合、英語で in *that* order (sequence)、また日本語で「この順序」というように、order (sequence) 及び「順序」という語を用いているが、その前の部分においては、この order (sequence) 及び「順序」という語が言語表現としては何ら使われておらず、読み手(あるいは聞き手)が、問題になっている二つ(あるいはそれ以上)の名詞句のその文中に現れる順序を視覚的に眺める(あるいは、その名詞句が音声的に順序をもって現れるその順序を聴覚的に聞く)ことによって、文中に第一義的には、また、明示的には示されていないその順序を、いわば、類推照応的に捉えることになるという意味において、これらの用法の *that* 及び「この」は、むしろ、現場指示の用法に近いように思われる。

なお、上で「いわば類推照応的に」と言ったのは、次のような意味においてである。すなわち、これらの用法においては、that や「この」の先行詞が、一見、先行文脈において既に明示的に示されているかのような印象を与えながら、その実、そうではなく、それらの指示詞によって指示されているものを正しく把握するためには、もう一度先行文脈中のその問題になっている箇所を解釈し直しながら、期待されているその先行詞を自分で決めなければならない、というような、ある意味で高度な文解析上の認知的テクニックを必要とするのである。

このように、これらの用法における指示詞の先行詞を決定する時の文理解のメカニズムが、外の用法の場合と比べてより複雑であるということが考えられる。このためであろうか、少なくとも英語の場合には、上に示したような、that を含む例文が問題のない文として一様に受け入れられる訳ではないという事実がある。たとえば、上に挙げた英語の例文のうち(59)や、次のような例文については、これを不自然な文であるとして退けるインフォーマントもかなりいるようである。

(70) Bill argued with Susan about appearing in this play in that order.

なお、このような性質をもった that の用法は、次のような文の中に現れる照応詞 so のもつ機能と似ているところがある。

(71) Lines connecting two rules indicate that those two rules must be so ordered.

(M. K. Burt, *From Deep to Surface Structure*, Harper & Row, 1971, p. 11, fn. 1)

すなわち、この場合の so の意味は“as shown by the lines”（「その線によって示された通りに」）ということであるが、その線の引かれ方、すなわち、その二つの規則の並べられた順序、を実際に目で見なければ、so によって示されている具体的な意味は把握できないのである。これは正に、このような場合に用いられる so が現場指示的照応詞の機能をもっていることを示すものである。

また次のような例における指示詞 that の用法についても同じことが言えるであろう。

(72) Ms LaMarche, who prefers that title, is one of a small but growing number of American women in management and an even smaller number of women in senior management.

すなわち、この文において、that title の先行詞は Ms であるが、“Ms LaMarche, who prefers” の部分を読んでいる、あるいは、聞いている段階では、Ms にしろ何にしろ、title なるものが話題となっていることについては、未だ、明確な合図が与えられていないのである。従って、次に続く部分 that title のところに来て始めて、「ああ、前の文脈の特に Ms の部分を問題にしていたのか！」という具合に納得する訳である。ところで、このような場合、先に示した類似の例と同じように、指示詞 this を用いることはできない。

このような機能をもつ that や so はまた、次のような文の中に用いられている指示詞 this の用法とも一脈通ずるものがある。

(73) This sentence, which I am now uttering, is false.
(Lyons (1977: 667))

この例文の中で用いられている this の用法のように、指示詞や指示代名詞が言語表現、あるいは、言語形式そのものを指す用法を Lyons (1977: 667) は textual deixis (テキスト的直示表現)⁽²⁷⁾と呼んでいるが、次に示す漫画の中に用いられている that もそのような用法の一つである。

(74)



Blondie
by Chic Young

すなわち、郵便配達人が“Is that you?”と言っている時その *that* が指すものは、言語表現としての *Ginger Snapdacker* すなわち、*Ginger Snapdacker* という名前そのものである。

同じような用法の *that* の別の例としては、*Grinder* (1971) の挙げている次のような例が参考になるであろう。

(75) It is clear why people call *Acid Eddie that*.

(76) Even *Acid Eddie's* mother calls him *that*.

テキスト的直示表現の日本語の例としては、次のようなものがある。

(77) 高等生物の染色体は、分裂期に塩基性色素によく染まるので、その名がある。

また、次のような例文の中に用いられている *so* も同じくテキスト的直示表現の例である⁽²⁸⁾。

(78) *Pigface* was so called because of his nose.

(79) *Tiny Tim* was so called because of his size.

(80) You call her a strange being yourself: from all you know, you have reason so to call her.

6. *this* and *that* と「あれこれ」

次に、指示詞の用法の中で、お互いに近くにある二つ（以上）の異なる物を一つ一つ指さして示す場合に用いる指示詞について考えてみよう。このような場合、指さしする時のその指先がその物に接触するか、あるいは、かなり近くにあるような場合には、日本語では、たとえば、「これですか、それとも、これですか？」のように指示詞「これ」を繰り返すことができるが、同じようなことが、次の例に示すように、英語についても当てはまる。

(81) Do you want *this one* or *this one*?

(82) *This one's* genuine, but *this one* is a fake.⁽²⁹⁾

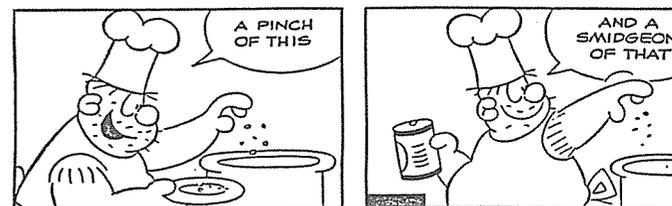
なお、指さしする時のその指先と指される物との距離が或る程度あって、

「これ」を用いるのがふさわしくないような場合には、日本語では、「それ」あるいは「あれ」を用いることになるが、その場合、次の例のように、「それ」と「あれ」を組み合わせて用いることが多い。

(83) それですか、それともあれですか？

このように、異なる指示詞を組み合わせて用いる用法は英語についても見られ、更に、英語では、指示される物を手や指で触れているような場合でも、次の例に示すように、このような言い方が許される。

(84)



Beetle Bailey by Mort Walker

このような現場指示的用法が拡大されて用いられると、たとえば、次のような表現として現れることになり、

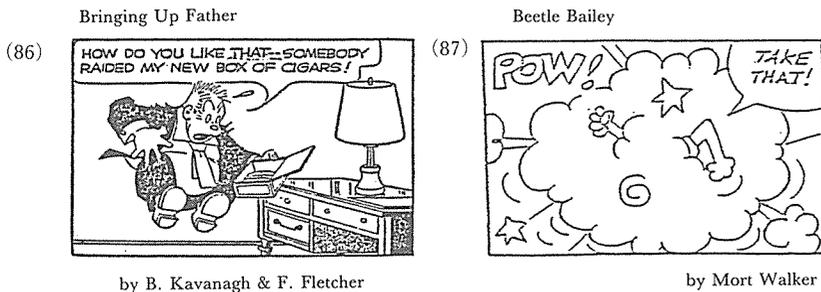
(85) The dentist gets a *point* for taking the X-rays, a *point* for opening the tooth, and a *point* for *this* and a *point* for *that*, and it adds up to about ¥5,000.

(E. J. MacFadyen, “Health Line—Japan,” *The Daily Yomiuri*, 4/28/’86, p. 6)

これが更に一般化されると、“talking about this and that” (*Webster's Third New International Dictionary*, *s. v. that*) に見られるような固定した表現 *this* and *that* や *this* or *that* となる。

なお、このように固定した表現として用いられる時は、よく知られているように、*this* and *that*, *here* and *there* のような並べ方だけが許され、**that* and *this* や **there* and *here* のようにはならないが⁽³⁰⁾、このことは日本語の「あれこれ」、「あれやこれや」、「あちこち」、「そこここ」、「そうこうするうちに」、「そんなこんな」などの場合にも言える⁽³¹⁾。

固定した表現として用いられる指示詞の用法の別の場合として、次の例に見るように、*this* と *that* のうち一方だけが許されるという場合がある。すなわち、日本語の驚きの表現「これはどうしたことだ！」あるいは「たまげたなあ！」に相当する英語の表現として、“How do you like that/*this!”があり、また、(喧嘩の) 相手を殴りつけるような場合の「これでもか！」あるいは「これでも食らえ！」に相当する英語の表現として、“Take that/?this!”がある。次の漫画を参照。



なお、同じような口語表現として、恋中にある二人の男女のことを表したり、大好物の食べ物のことを言うような場合に用いる次のような表現もこの中に加えることができるであろう。(The Random House Dictionary of the English Language, s.v. *that*)

- (88) The star and her director are that way.
(89) I'm that way about coffee.

7. 指示詞と言語習得

以上これまでの節における指示詞に関する考察は大人の言語知識に関するものであったが、最後に、子供による言語習得に関する指示詞の問題を簡単に取り上げてみよう。

まず、英語の指示詞については、これまでになされた言語習得に関する研究の中から、興味ある結果を幾つか指摘することができる。たとえば、Tfouni and Klatzky (1983) は、2歳11か月から4歳2か月までの子供18人を対象にしてその指示詞に関する言語知識を調べた結果、指示詞のうち *this* と *here* は言語的に有標 (marked) であるのに対して、*that* と *there* は無標 (unmarked) である、すなわち、子供達にとって、*that/there* (の機能ある

いは用法) を理解するよりも、*this/here* (の機能あるいは用法) を理解する方が難しいということを示唆する実験結果を報告している⁽³²⁾。

また、2歳7か月から5歳3か月までの子供36人を使って実験した Clark and Sengul (1978) によると、子供は指示詞の習得に関して、少なくとも、次の三つの段階を経ることになる。すなわち、異なる指示詞の間の区別ができない段階 (平均年齢3歳3か月)、部分的に区別をすることができる段階 (平均年齢3歳10か月)、及び、大人と同じように完全に区別ができるようになる段階 (平均年齢4歳0か月) の3段階である。

次に、Murasugi (1985, 1986a) は、3歳0か月から4歳10か月までの子供26人を対象に彼らの言語習得の状態を調べた結果、次のような結論を得ている。すなわち、物音を指したり、箱の中であって外から見えない物などを指したりする場合に用いる指示詞⁽³³⁾は、最初 *this* か *it* が用いられ、その後次第に *that* (すなわち、大人の用法) へと移行していく。たとえば、大人の場合には、戸外の騒音にたいして、あるいは、台所で焦げ臭い臭いがするのに対して、“What's that?” のように指示詞 *that* を用い、また、誰かが後ろから目隠しをしたような場合には、“Who is that?” のように同じく *that* を用いるのが普通であるが、指示詞の習得が未だ完全ではない子供の場合には、このような場面において、“What is this?”あるいは“What is it?”のように、指示詞 *this/it* を用いる時期があるということである。

以上、ここに紹介したのは英語の指示詞に関する言語習得の研究のごく一部に過ぎないが、これからだけでも、全体として英語の指示詞に関する言語習得の研究がかなり興味あるものになって来ているのではないかということが窺われるであろう。それに対して、日本語の指示詞についての言語習得の研究は、残念ながら、未だほとんど手が付けられていない状態である。せいぜい、指示詞に関する言語習得についての部分的観察及び散発的評言が見られる程度であると言っても言い過ぎではないであろう。

そのような部分的観察の一例を次に挙げてみよう。たとえば、佐久間 (1951: 26) は、2, 3歳の子供を観察した結果、「これ・あれ」「ここ・あそこ」「この・あの」「こんな・あんな」の例が見出されるのに対して、「それ・そこ・その・そんな」の例が見出されないことを指摘している。この理由として、堀口 (1978: 33) は、「聞き手の存在を考慮するという社会性が未発達のために、幼児は自己抑制を知らず、現場指示にあって、ただ自己の知覚する近・遠の差によるコ・アだけで事物を指示するのであろう。」と述べ、また、「中称ソは、対話の場において、話し手が聞き手の存在を考慮して自

己抑制するところから生れ、そして発展したのかもしれない。」と述べている。

この堀口の観察は、広い意味での言語知識のうちの特に語用論に関する知識の発達段階を問題にしているという意味において、興味ある指摘をしていると思われる。なぜならば、指示詞の用法の全体的把握が可能になるのは幼児の認知的、意味論的及び語用論的知識の習得及び発達が共に十分なされた段階においてであると思われるからであり、また、これらの言語知識が、日本語においても英語においても、どのような発達段階を経て、また、どのような相互作用をしながら習得されていくのかを探るのは重要なことであると思われるからである。

なお、幼児の語彙の発達のうち「こそあど」について、大久保（1968：73）は「全体的にいうと、近称『こ』の類が早く使われ、ついで遠称『あ』の類、中称『そ』の類はおくれるようである。」と述べている。

すでに第一節において指摘したように、現場指示用法の場合、日本語においては、指し示そうとしている物を手で触れている、あるいは、それを手に持っているかどうかということが、指示詞「これ」を用いるか、それとも「それ」あるいは「あれ」を用いるかということを決める際にほとんど決定的と言える程の役割を果たすのに対して、英語においては、それが日本語の場合程には決定的な要因とならないという事実がある。このように、日英語間においては、指示詞選択の際に、「接触」という要因のもつ重要性の違いが見られるのであるが、指示詞に関するそのような言語知識は、それぞれの言語において、一体どのような過程を経て子供によって習得されていくのであろうか。このような間に答えることが、今後の指示詞に関する言語習得の研究に課せられた課題の一つとなるであろう⁽³⁴⁾。

8. まとめ

以上、日本語の指示詞「これ・それ・あれ」と英語の指示詞 *this, that* の用法についてみられる幾つかの重要な相違点を、できるだけ具体的な例を挙げながら指摘した。指示詞の用法にみられる日英語の違いについては、従来、部分的な指摘、あるいは、エピソード的な事実観察の紹介はなされていたが、日英語比較の観点から、特に、英語の指示詞の用法について十分な事実の観察が行われていたとは言えないように思う。指示詞の用法に関して事実の観察を深めていくと、そこに幾つか異なる重要な要因が働いていることが分かり、たとえば、〈縄張り〉のような単一の特性あるいは要因だけで関

連ある事実を全体的に説明しようとするのは困難であることが分かる。この論文の中で我々が指摘した英語の指示詞についての用法、及び、それらの点に関する日英語の相違は、従来のもものと比べてより深い言語事実についての観察に基づいているとは言え、未だ未だ不十分なところがある。今後のより充実した指示詞の研究が待たれる所以である。

注

* この論文で以下指摘する指示詞に関する英語の用法を考察する上で、次の方々の御意見が参考になった。その方々に対してここに深く感謝の意を表したい。但し、本論の中に英語の指示詞についての誤った観察が含まれているとしたならば、それは全て筆者達の責任であることを申し添えておく。Mary Althaus, Erich Berendt, Doug Birdsall, Jeanie Birdsall, Christine Chapman, Brent DeChene, Charles Gardiner, Allison Jessen, Linda Letten, Charles Lummis, Kathryn Mizuno, Karen Mutch, Scott Reynolds.

- (1) 日本語の指示詞に関する研究文献については、少なくとも、1980年までのものについては、高橋・鈴木（1982）に詳しいコソアド関係研究文献（1833～1980）がある。
- (2) このことに関して、Levinson（1983：61）の次のような観察を参照。
“Given the undoubted importance of deixis to philosophical, psychological and linguistic approaches to the analysis of language, there has been surprisingly little work of a descriptive nature in the area, with a consequent lack of adequate theories and frameworks of analysis. [...] There is also, though, a growing body of literature on the acquisition of deictic terms by children, . . .”
- (3) 指示詞 *that* のもつこのような用法に言及しているものとして、外に Lakoff（1974）、Levinson（1983：81）、Quirk et al.（1985：374）などがある。なお、Lakoff（1974）の言う“emotional-deictic *that*”の観点を取り入れて日本語のア系の指示詞（「あれ」、「あの」等）の一用法を説明したものとして Kitagawa（1979）がある。また指示詞 *this* が共感や親密な気持を示す場合に用いられることについては Lakoff（1974）、Levinson（1983：81）などを参照。なお、*this* と *that* の使い分けが話し手の示す「親近感」、「興味」、「客観的な態度」、「冷淡な態度」などと密接に関わっていることを指摘したものとして、服部（1968：78-79）がある。
- (4) 安藤（1986a）も、話し手が自分の手に持っているものを“‘What’s that?’”のように *that* で指すことができるという Lyons（1981）の指摘を紹介している。そのような *that* の用法の説明として、安藤は、「われわれの言葉では、話し手は『それは何ですか？ わいろなら受け取りませんよ』というように、それを自分の〈縄張り〉に属するものとして認めていないと説明される。」（p. 71）としているが、そこに例として挙げられた日本語「それは何ですか？」はこのような場合においては不自然であり、自分の手に持っているものを指すのであれば、むしろ、「こ

れは何ですか?」となるはずである。

- (5) 但し、自分の身体の傷を指し示す同じような表現として、次のように、指示詞 *that* を用いたものもある。

And that scar is from when the rope broke during a fire drill in college. (Tanz 1980, p. 72)

- (6) Fillmore (1971: 13) は更に、電話の相手を確認する時アメリカ英語では “Is this Harry Schwartz?” (= “Are you Harry Schwartz?”) のように言うが、この場合 *this* を用いるのは聞き手の立場に立った捉え方をしていることになることと述べている。

なお、Sato (1985: 34) は本文で示した、“It’s this/that one” の用法に触れ、「[指示詞の用法に関し重要な要因である]『話し手の領域』というものは、常に物理的で固定しているものであるとは限らず、時には、心理的で柔軟性をもったものであり得る」ことを述べている。

- (7) このように、*that* が *this/that* の対立が中和される場合に用いられることについては Kuroda (1968: 250; 1969: 271) にもその指摘がある。また、McCool (1984) は英語の *this/that* に相当する古期フランス語 (Old French) の *cist/cil* の用法が伝統的な *proximity/remoteness* の区別では十分に説明できないことを示している。すなわち、英語の *that* に相当する *cil* には [-proximity] の用法の外に、*proximity* と *remoteness* についての区別を問題にしない [∅ proximity] の用法 (すなわち、[proximity] の特性に対して無標である用法) があり、更に興味あることには、[+proximity] の用法も見られるということである。

なお、OE において、指示詞 *this* が有標語 (marked term) であったのに対して *that* は無標語 (unmarked term) であった、すなわち、*that* の方が *this* よりも幅広い用法をもった指示詞であったことについては Ikegami (1970) を参照。

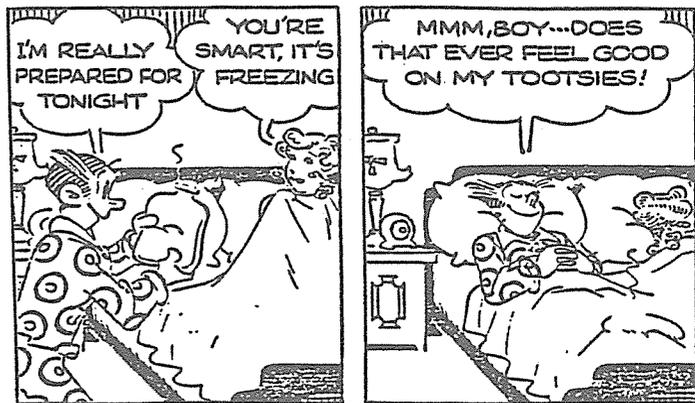
- (8) なお、疑問文 “What’s this?” と “What’s that?” の違いについて、Tanz (1980: 80) による次のような記述を参照。

“(28) What’s that?”

(29) What’s this?”

Question (28) is the more general question, but it does not have absolute generality. If the speaker is holding the relevant object in his hand and examining it, only the question “What’s this?” is appropriate. Admittedly this is a special case, but the point is precisely that special cases exist.”

- (9) 日本語の場合は、単に手で触れている場合だけでなく、足で触れているような場合にも同じように「この」、「これ」を用いるが、英語では、足の先は頭 (あるいは身体の中心) から遠いと感じられるためであろうか、そのような場合にも一般的に *that* を用いることができるようである。足で触れている物を指すのに *that* を用いることができることを示す例として、次のような漫画を参照。



Blondie by Chic Young

このような場合注意しなければならないことは、指示詞の *that* が身体の一部に触れている物自身を指すのではなく、温かいとか冷たいとか、あるいは、気持ちいいとかいう感じあるいは感覚を指していると考えられる場合があるということである。たとえば、湿布を足に貼り、温かくて気持ちがいい時など、“That feels good.” (「ああ、(これは) いい気持だ。」) のように言う。従って、場合によっては、*that* によって指示されているものが、物そのものなのか、感覚なのかははっきりしないこともある。しかし、いずれの場合でも、日本語では、もし主語として指示詞を用いるとすれば、「それ」、「その」ではなく、「これ」、「この」になることは興味あることである。

- (10) ここに示す日本語訳は、いずれも、(テレビ) 映画の吹き替えのせりふの中に現れたものである。なお、(11) 中の “Well, would you look at that!” に対する日本語訳は「あれまあ、大当り。」となっているが、ここでの問題点に添って指示詞を用いて訳すとすれば、「こいつを見てみる。」のようなものになるであろう。
- (11) 日本語の指示詞「これ・この」が英語の指示詞 *that* に相当する別の場合として、ジェスチャーをしながら指示詞を用いる次のような場合を指摘することができる。すなわち、物真似などのジェスチャーをしている相手のそのジェスチャーを止めさせようとする場合、日本語では、自分も相手と同じそのジェスチャーをしながら、「こんなことをしちゃいけない。」とか、「これは止めなさい。」などのように、指示詞「こんな・これ・この」を用いることになるが、このような場合、英語では、“Cut that/it out!” のように、指示詞 *that* あるいは代名詞 *it* を用い、指示詞 *this* を用いないのが普通である。次に示すのは、武田泰淳作「嫂のすえ」の一節 (現代文学大系57『武田泰淳』, 筑摩書房, 389ページ) 及びその英語訳である。

『「心臓が神経を? 何を一体、我々はやりつつあるのか」私は両手を頭上に拳

げた。するとアスファルトの上に、自分の影が、ゴリラが歩き出したように落ちていた。私はわざと膝を曲げ、頭上の両手をゆらゆらさせ、ゴリラのようにして深夜の裏街を歩いた。向うから制服の巡警が三名、靴音をそろえて歩いて来た。新しい紺地の襟に金文字の番号がピカピカ光っていた。江北人らしくみな背が高かった。

『コラ、これをやめろ。これはいかん』なかの一人が、私の真似をして見せ、おだやかにいませめた。

“‘The heart—the nerves? What the hell we doing?’

I raised my hands over my head. I saw my shadow fall on the asphalt as if a gorilla had just started walking. I deliberately bent my knees, and waved my hands above my head, I did a gorilla walk along the alley. Three uniformed police were coming from the opposite direction. Their shoes sounded in unison. Their gold numerals glittered on their fresh blue collars.

‘Hey! Cut that out. Can’t do that,’ one of them said, mimicking me, gently rebuking me.’

(Tajun Takeda, *This Outcast Generation and Luminous Moss*, p. 65. Translated by Yusaburo Shibuya and Sanford Goldstein, Rutland, Vermont: Charles E. Tuttle Co., 1967)

このように、日本語では、話し手自身が聞き手と同じジェスチャーをしている場合は、そこに用いられた指示詞はまず自分の方のジェスチャーを直接的には指すことになる。一方英語においては、そのような場合でも、むしろ、相手のジェスチャーそのものを直接的に指示する働きをもつ指示詞の方を選ぶようである。但し、話し手のしているジェスチャーがかなり大袈裟な場合には、日本語の場合と同じように、自分自身のジェスチャーそのものを直接受ける指示詞、すなわち、*this* を用いることができるようである。なお、英語訳の下線部の“Can’t do that”に現れる指示詞 *that* については、これを *this* に変えても構わないとする人もいる。

なお、ジェスチャーの中には指示詞 *this/that* をその一部に含むイディオムの言語表現と共に用いられるようなものがある。たとえば、小林 (1975: 185-86) の指摘するように、「中指と人さし指を2本揃えて甲を表にさし出し“‘They’re as close as that.’”とって、人間関係の緊密さをその指の並び方で語らせたり、「中指を人さし指にからませて (cross one’s fingers と同じ指型)、“‘He’s got his staff like this.’”と」言うことにより、「彼 (中指) が彼の部下 (人さし指) をがちりおさえている様子」を表したりするような場合である。(小林 (1975: 186) にはこれらの手まねを具体的に示すための挿絵がある。) 但し、このような表現を使うかどうか、あるいは、使う場合には、それぞれ、*this* を用いるか、*that* を用いるかについては個人差、あるいは、方言の違いがあるようである。

- (12) 「話し手 (あるいは聞き手) の勢力範囲」の概念が日本語 (及び英語) の指示詞の用法の記述だけでなく、*yo, -ne* のような終助詞の用法においても重要な働きをすることを指摘したものとして Kamio (1979) がある。

- (13) この例は野沢智子氏の指摘による。

- (14) 通常 *that* (あるいは *there, then*) を用いるところに *this* (あるいは *here, now*) を用いて、話し手がその話題になっている物、状況あるいは場所に対して積極的に関わっていることを示したり、あるいは、聞き手の態度や見解に同調することを示したりする用法のことを Lyons (1977: 677) は“*empathetic deixis*” (「感情移入的指示用法」と呼んでいる。

- (15) 同じような例の指摘が小笠原 (1984: 37) にもある。なお、文脈指示用法の *this* と *that* に見られる違いの一つとして Lakoff (1974: 349) が挙げている次のような事実に注意されたい。

“*That* is used in a fashion parallel to, but not identical with, *this* in its discourse-deictic uses. First, *that* can be used by a speaker to comment on an immediately prior remark by another. *This* cannot be so used.

- (23) Dick says that the Republicans may have credibility problems.

{*This*
That} is an understatement.

This may be used only if the two sentences are uttered by the same speaker.’

- (16) 但し、この文は話し手が相手の着ている服を手で触りながら発話した場合の文ではなく、ある程度話し手と聞き手の間に物理的な距離があるような場面での発話であると解釈するものとする。

- (17) Ehlich (1982: 328) の挙げている次の原則を参照。

“If deictic and anaphoric expressions refer to the same entity in the speech act space, the deictic expression is used in the first instance whereas the anaphoric expression (s) is/are used in the following instance (s).”

- (18) このような原則に反して、二回目以後も同じように指示的表現を用いると不自然になることを示す例として、Ehlich (1982: 329) は次のようなテキストを挙げている。

(a) I want to tell a story about an old man, about a man who doesn’t say a word any more, who has a tired face, is too tired to smile, too tired to be mean. (b) *This (one)* lives in a little town, at the end of the street or near the corner. (c) It’s almost not worth it to describe *this (one)*, (d) hardly anything distinguishes *this (one)* from others. (e) *This (one)* wears a grey hat, grey trousers, a grey jacket and in the winter the long grey overcoat, (f) and *this (one)* has a skinny neck, the skin of which is dry and wrinkled, (g) white shirt collars are for *this (one)* much too big. (h) On the top floor of the house, *this (one)* has his room, (i) perhaps *this (one)* was married and had children, (j) perhaps *this (one)* lived in another town. . . .

- (19) 例文(26)は Isard (1975: 290) よりの引用。イタリアク体の二つの単語はそれらが同一指示的であることを表す。なお、Isard (1975: 290-91) によると、小さな子供が(26)のように、二番目の *that* にストレスを置かず発音して、二つの *that* が同一指示的であるような解釈を許すことがあるかも知れないが、但し、このような用法は標準的なものではないだろうとのことである。

- (20) なお, Linde (1979: 350) は “First square 19 and then cube it.” の文がその *it* の先行詞に関してあいまい文になると Isard (1975) が主張していると言っているが, これは Linde の誤解である。Isard があいまい文であると言っているのは, この文ではなく, 次の文 (=Isard’s ex. (11)) である。

First take the square of 19 and then cube it.

すなわち, この文において, *it* は 19 (「19 という数字」) 及び the square of 19 (「19 の二乗」) のいずれをも指し得るので, この文はあいまい文であることになる。

- (21) 推論照応については, 寺津・山梨 (1979), Greene (1980), 千葉・稲田 (1984) を参照。なお, 林 (1983) はこの推論照応のことを, 「指示することに伴って起こる, 先行表現のとらえなおしの現象」(p. 64) と呼んでいる。
- (22) Terazu et al. (1980) は文を先行詞とする *it* と *that* との間に見られる相違点として, 前者が後者とは異なり, 言語表現により明示的に示された先行詞を常に要求するという事実を指摘している。このような事実を示す例として, 彼らが挙げている次のような文を参照。(p. 44, ex. (19b))

There is evidence that this drug clears the nose and deep sleep usually follows directly upon its application. I will try it tonight to see whether it can be really relied on to *do this*/**do it*.

なお, 文脈指示用法の *that* が, *it* を初めとする同じ用法のその他の指示詞及び代名詞を用いることのできないような時にでも, 言わば, 助っ人役として用いることができるような場合があるということについては, Channon (1980) を参照。

また, 談話 (discourse) の観点を取り入れて代名詞 *it* と指示詞 *that* の用法の違いを取り扱っているものとして, Linde (1979) がある。

- (23) この例は島村礼子氏の指摘による。
- (24) 英語における指示詞と時制との関連性について一般的に言えることとして, 次のような言語現象がある。すなわち, たとえば, おいしい食事を食べている時には, “This is a delicious meal!” とか “This dinner is delicious!” のように言うが, その食事が終わった時には, “That was a delicious meal!” とか “Oh, boy! That dinner was delicious!” のように言う。この場合, 食事が終わった瞬間に, 過去時制の動詞を用いて上のように言うことができるということである。同じような例として次の文を参照。

“That was a long program, and now I’m hungry.” (テレビの番組を見終えて)

“Y-a-a-w-n . . . That was a great nap!” (昼寝から目覚めて)

なお, 「近接の *this*, *here* のタイプの指示表現は, 離接の *that*, *there* のタイプの指示表現よりも親近感をもたらす」とし, 従って, 別れぎわの挨拶としては, 次の文のうち, 「近接性を示す *a* の方が距離をおく *b* にくらべてより丁寧である」という事実については, 山梨 (1986: 205) を参照。

- a. { *This* } was a lovely party.
b. { ?*That* }

- (25) なお, Lakoff (1974: 347) は指示詞 *this* を用いた次のような二つの文を比較して,

*Bill argued about appearing in this sentence in this order with Susan.

(?) Bill argued with Susan about appearing in this sentence in this order.

次のように述べている。

“Apparently the ‘order’ referred to by *this* must already have been established at the time *this* occurs in the sentence.”

但し, 上の二番目の例文に現れる *in this order* の中の指示詞 *this* がこの文自身によって示されている *Bill* と *Susan* の順序をその先行詞とし得るということを示そうとしているのかどうかについては, 必ずしも明らかではない。(既に本文中に示したように, 我々の調査によると, このような解釈は許されないことになる。)

- (26) これらの文を次のような, 「その」を用いた文と比較せよ。

L の変形規則 T_1, \dots, T_n の論理的に可能なすべての適用順序のうち条件 (22) および後述の普遍的な条件に違反しないものが L において可能な適用順序であり, そのような順序で T_1, \dots, T_n を適用して得られる派生が L において可能な派生である。

(太田朗・梶田優『文法論Ⅱ』, 440ページ)

上の文において, 指示詞「その」(あるいは「そのような」) の先行詞は文脈指示的に示された下線部である。

- (27) テクスト的直示表現について更に詳しくは, 小川 (1986) を参照。
- (28) 例文 (78), (79) は Postal (1969: 232, note 13) からの引用, また, 例文 (80) は Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Everyman’s Library, p. 284 からの引用である。なお, Postal はこのような場合の *so called* を「いわゆる」の意味の *so called* の場合と同じようにハイフンを用いて *so-called* のように表記しているが, このような表記法は一般的ではないように思われるので, ここではハイフンを除いてある。
- (29) 例文 (81) 及び (82) は, それぞれ, Fillmore (1982: 54) 及び Levinson (1983: 65) からの引用である。

なお, 野入 (1979: 133) はこのような場合のドイツ語に関する事実として, 次のような観察をしている。すなわち, 日本語では, 同一人が同一地点で同一の地図を指さしているような場合には, 第二の指示にも「ここ」が用いられる (たとえば, 「ここに一枚の地図があります。これはヨーロッパの地図です。ここにドイツがあります。そしてここに (*そこに/*あそこに) フランスがあります。」のように言う) のに対して, ドイツ語ではこのような場合にも *hier* と *dort* の組み合わせを用いて次のように言うことができる。“Hier ist eine Karte; das ist eine Landkarte von Europa. Hier ist Deutschland und dort ist Frankreich.”

(因に, 野入 (1979: 136-40) には, ドイツ語の *hier* が日本語の「ここ」だけでなく「そこ」に相当することもあるという事実の指摘もある。)

- (30) Tanz (1980: 154) 参照。なお, Cooper and Ross (1975) は単にこのような指示詞に関するイディオムの表現だけでなく, bigger and better (cf. *better and bigger), fore and aft (cf. *aft and fore), kit and caboodle (cf. *caboodle and kit) などの

ような、一般的に、等位構造に現れる要素の順番が厳密に固定されているような表現全般について、それらの要素の順序が幾つかの意味的及び音韻の原則によって支配されていることを指摘している。日本語に見られる「おじおば」「酒と肴」「勝ち負け」「親子」「あちこち」「うえした」「たてよこ」などの凍結句に対する意味原則と音声原則については村田(1984)を参照。

- (31) 森田(1982:34), 安藤(1986a:71) 参照。
 (32) これと同じような実験結果が de Villiers and de Villiers (1974) においても示されているが、一方これとは逆の結果も Tanz (1980) により報告されている。

なお、本文で示した Tfouni and Klatzky (1983) による実験報告とは部分的に異なる報告として、Wales (1986) がある。すなわち、Wales は4歳から7歳までの子供80人を対象としてその指示詞に関する習得状況を調べた結果、場所を表す指示詞 here と there は this 及び that と比べてその用法がより正しく習得されていることを報告している。同じように、Clark and Sengul (1978) も、here/there の方が this/that よりもその習得が早いことを指摘している。

- (33) Murasugi (1985, 1986a, 1986b) によると、このような指示詞の用法は次のような Invisibility Principle によって説明されることになる。

Invisibility Principle:

The human vision governs the use of English demonstratives *this* and *that*. If the object in focus is in the physical space and is invisible, either *this* or *that* is employed. If the object in focus is outside the physical space and is invisible, *that* is employed. (Murasugi 1986a, p. 178)

なお、Murasugi は更に、英語の指示詞の用法を支配する別の原則の一つとして、たとえば、びっくり箱を開けながら相手に突き出して、“Look at that!” と言ったり、相手を殴る真似をして拳を突き出しながら、“Take that!” と言ったりするような場合の *that* の用法を説明するための Vector Principle なども提案している。

- (34) 指示詞に関する日英語の比較を取り扱った論文としては、服部(1961, 1968)、宮田(1961)、空西(1961)、Coulmas (1982)、安藤(1986a, b) などがあがるが、いずれも、言語習得の観点は取り入れられていない。

参考文献

- 安藤貞雄. 1986a. 「日英語のダイクシス(上)」『英語教育』2月号, pp. 70-75.
 ————. 1986b. 「日英語のダイクシス(下)」『英語教育』3月号, pp. 74-79.
 Channon, Robert. 1980. “Anaphoric *That*: A Friend in Need.” J. Kreiman and A. E. Ojeda (eds.), *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora*, pp. 98-109. Chicago Linguistic Society.
 千葉修司・稲田俊明. 1984. 「アメリカの英語教科書に見られる代名詞の取り扱いについて」『英語教育』7月増刊号, pp. 76-91.
 Clark, Eve V. and C. J. Sengul. 1978. “Strategies in the acquisition of deixis.” *Journal of Child Language* 5, pp. 457-75.

- Cooper, William E. and J. R. Ross. 1975. “World Order.” Robin E. Grossman et al. (eds.), *Papers from the Parasession on Functionalism*, pp. 63-111. Chicago Linguistic Society.
 Coulmas, Florian. 1982. “Some Remarks on Japanese Deictics.” Jürgen Weissenborn and W. Klein (eds.), *Pragmatics and Beyond III: 2-3 (Here and There: Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration)*, pp. 209-21. John Benjamins Publishing Company.
 de Villiers, P. A. and J. G. de Villiers. 1974. “On This, That, and the Other: Nonegocentrism in Very Young Children.” *Journal of Experimental Child Psychology* 18, pp. 438-47.
 Ehlich, Konrad. 1982. “Anaphora and Deixis: Same, Similar, or Different?” R. J. Jarvella and W. Klein (eds.), *Speech, Place, and Action*, pp. 315-38. John Wiley & Sons Ltd.
 Fillmore, Charles. 1971. “Lectures on Deixis.” Unpublished ms. Linguistics Dept., Univ. of California, Berkeley.
 ————. “Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis.” R. J. Jarvella and W. Klein (eds.), *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, pp. 31-59. John Wiley & Sons Ltd.
 Greene, Jennifer. 1980. “Which.” R. W. Shuy and A. Shnukal (eds.), *Language Use and the Uses of Languages*, pp. 143-61. Georgetown University Press.
 Grinder, John. 1971. “Double Indices.” *LI* 2, p. 572.
 服部四郎. 1961. 「『コレ』『ソレ』『アレ』と this, that」『英語青年』8月号, pp. 4-5.
 ————. 1968. 『英語基礎語彙の研究』, 三省堂.
 林 四郎. 1983. 「私の文章・文体論」『日本語学』5月号, pp. 64-67.
 堀口和吉. 1978. 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8号, pp. 23-43.
 Huxley, Renira. 1970. “The Development of the Correct Use of Subject Personal Pronouns in Two Children.” G. B. Flores d’Arcais and W. J. M. Levelt (eds.), *Advances in Psycholinguistics*, pp. 141-65. North-Holland.
 Ikegami, Yoshihiko. 1970. “Some Speculations on the Origin and Development of the Conjunctive Use of *That* in Germanic.” 『英文学研究』英文号, pp. 3-17.
 Isard, Stephen. 1975. “Changing the Context.” Edward L. Keenan (ed.), *Formal Semantics of Natural Language*, pp. 287-96. Cambridge University Press.
 Kamio, Akio. 1979. “On the Notion Speaker’s Territory of Information: A Functional Analysis of Certain Sentence-Final Forms in Japanese.” George Bedell et al. (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, pp. 213-31. Kenkyusha.
 Kitagawa, Chisato. 1979. “A Note on *Sono* and *Ano*.” George Bedell et al. (eds.) *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, pp. 232-43. Kenkyusha.
 小林祐子. 1975. 『身ぶり言語の日英比較』, ELEC.
 国広哲弥. 1985. 「マンガの言語学」『言語』vol. 14, no. 11, ジュニア版 No. 19, p. vii.
 Kuroda, S.-Y. 1968. “English Relativization and Certain Related Problems.” *Language* 44, pp. 244-66. Also in D. A. Reibel and S. A. Schane (eds.), *Modern Studies in Transformational Grammar*, pp. 264-87. Prentice-Hall, Inc., 1969.

- Lakoff, Robin. 1974. "Remarks on *This* and *That*." *CLS* 10, pp. 345-56.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*, Cambridge University Press.
- Linde, Charlotte. 1979. "Focus of Attention and the Choice of Pronouns in Discourse." Talmy Givón (ed.), *Syntax and Semantics* vol. 12, pp. 337-54. Academic Press.
- Lyons, John. 1975. "Deixis as the Source of Reference." E. L. Keenan (ed.), *Formal Semantics of Natural Language*, pp. 61-93. Cambridge University Press.
- . 1977. *Semantics: 2*. Cambridge University Press.
- . 1981. *Language, Meaning and Context*. Fontana.
- McCool, George J. 1984. "The Old French Demonstrative System: A Semantic Analysis." *Word* 35, pp. 205-17.
- 宮田幸一. 1961. 「日本語と英語の指示詞——服部四郎氏の考察を読んで——」『英語青年』11月号, pp. 20-21.
- 森田良行. 1982. 「指示詞の扱い方」『講座日本語教育』第18分冊, pp. 22-37. 早稲田大学語学教育研究所.
- Murasugi, Keiko. 1985. "A Study on the Acquisition of English Demonstratives *This* and *That*." M. A. Thesis, Tsuda College.
- . 1986a. "A Study on the Acquisition of English Demonstratives 'This' and 'That': The Acquisition of Invisibility Principle." *Descriptive and Applied Linguistics*, vol. XIX, pp. 175-86. ICU.
- . 1986b. "The Adult System of English Demonstratives *This* and *That*." *Tsuda Inquiry* (「論集」) vol. 7, pp. 140-50. 津田塾大学大学院英文学会.
- 村田忠男. 1984. 「人工オノマトベによる日本語音声ハイエラーキ」『言語研究』第85号, pp. 68-90.
- Nagasawa, Kunihiro. 1985. "The 'Neutralization' of Deictic *That*." 大学英語教育学会『紀要』第16号, pp. 123-45.
- 野入逸彦. 1979. 「Hier·dort·da と『ここ・そこ・あそこ』」『人文研究』第31巻第3分冊, pp. 125-47. 大阪市立大学文学部.
- 小笠原林樹. 1984. 「教師のための基礎英文法・語法(11)」『英語教育』2月号, pp. 35-37.
- 小川洋通. 1986. 「テキスト的直示表現」『英語青年』7月号, p. 9.
- 大久保愛. 1968. 『幼児言語の発達』, 東京堂出版.
- Postal, P. M. 1969. "Anaphoric Islands." *CLS* 5, pp. 205-39.
- Quirk, Randolph et al. (eds.) 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 佐久間鼎. 1936. 「『指す語』の體系」『現代日本語の表現と語法』, pp. 34-43. 厚生閣.
- . 1951. 『現代日本語の表現と語法』, 改定版, 厚生閣.
- Sato, Nobuo. 1985. "On the Definite Article and the Demonstratives." 『英語学論考』第4号, pp. 25-35. 東北大学文学部英語学研究室英語学研究会
- 空西哲郎. 1961. 「人称と『話の場』」『英語青年』11月号, pp. 6-8.
- 高橋太郎・鈴木美都代. 1982. 「コ・ソ・アの領域について」国研報告71『研究報告集』-3-, pp. 1-44.
- Tanz, Christine. 1980. *Studies in the Acquisition of Deictic Terms*. Cambridge University Press.
- 寺津典子・山梨正明. 1979. 「日本語における照応現象について(その一)」『計算機による日本語談話行動の総合モデル化』(文部省科学研究費昭和53年度研究報告書), pp. 25-60.
- Terazu, N., M. Yamanashi, and T. Inada. 1980. "Anaphora in Japanese (1)" *SEL* 8, pp. 32-52.
- Tfouni, Leda V. and R. L. Klatsky. 1983. "A Discourse Analysis of Deixis: Pragmatic, Cognitive and Semantic Factors in the Comprehension of 'This', 'That', 'Here' and 'There'." *Journal of Child Language* 10, pp. 123-33.
- Wales, Roger. 1986. "Deixis." Paul Fletcher and M. Garman (eds.), *Language Acquisition*, 2nd ed., pp. 401-28. Cambridge University Press.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』(新英文法選書 第12巻), 大修館.
- 矢澤真人. 1985. 「『こそあど』と空間の捉え方」『言語』12月号, p. 44.